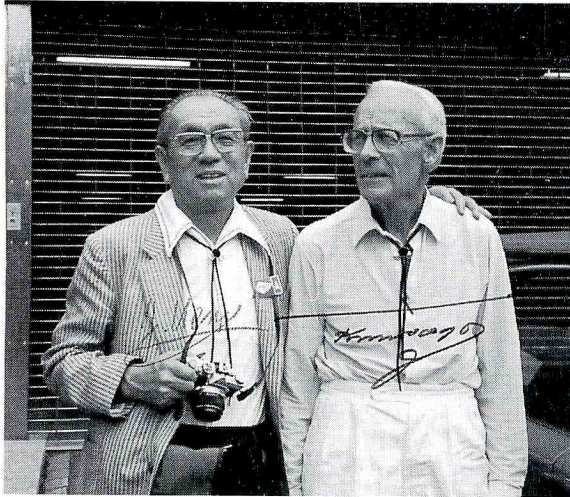


原 著



Dr. J.Ueno (69) and Dr. K.Faegri (73)  
(University of Bergen, 1982. 07. 15)

## 花 粉 学 講 話 IV (No.32-41)

上 野 実 朗

Souvenirs palynologiques

IV (No. 32-41)

Jitsuro UENO

(受付：1982年10月30日)

32 第1回ノルウェー・ベルゲン大学フェーグリー  
博士訪問 (昭和31年6月8日-11日)

**First visit of Dr. K.Faegri, University of  
Bergen, Norway (1956 06 08-11)**

ベルゲンは北海に面した良港でハンザ同盟 Hanseatic League の一中心として中世紀から栄えて来た。したがって進取の気性に富んだ人々が多く、これをベルゲン子といっている。ベルゲン大学の自然学学部は有名である。

1956 (昭和31)年6月8日から11日まで私はフェーグリー研究室で勉強した。当時はノルウェーを旅行する日本人は殆どいなかった。スウェーデンのストックホルム大使館の友人から、ノルウェーには日本の外交機関も商館もない。スウェーデン大使館がノルウェー大使館を兼ねている。正式に大使館へ連絡して、ノルウェーに入る日本人は君一人だから注意してくれと言われた。

パリの Van Campo 博士研究室で1年間留学していた私は、北欧の白夜のシーズンにこの旅行を思いついた。北欧のパス・コントロール (出入国手続)

は日本人にも極めて簡単で好意的であった。ノルウェーの首府オスロ Oslo で KABI K.K. の花粉研究所ラグナー・ルンデン L.Lunden 博士を訪れた後、6月8日朝、小雨降るオスロ駅からベルゲン行の列車に乗った。約1日かかってフィヨルドの間をぬける旅を楽しんだ。夕方ベルゲン駅のホームをトランクを下げて歩いてゆくと、無帽長身の紳士が近づいて来た。フェーグリー博士との初対面であった。

彼は旧式ながら最高級の Rosenkrantz ホテルへ案内してくれた。当時は電力事情は悪く、室には小さいランプがひとつだけの室であった。ここから歩いて2キロほど、時間で30分位、大学の研究室へ通った。石造5階建てで黄色の建物。入口には木造の旧式ドアがあり、UNIVERSITETETS BOTANISKE MUSEUM の札があった。彼は三ツ揃のグレーの背広、右手にカギ束をにぎり、自転車に乗り、黒メガネをかけ、その温顔は忘れ得ぬものがあつた。博士は私を市中のアパートの自室に招待して、夫人の手料理でノルウェー名物を食べさせてくれた。5歳位のクヌート坊やも同席した。

心からのもてなしと、活気に満ちた研究室の雰

気の数日は過ぎ、1956（昭和31）年6月11日夜10時半にベルゲンに別れをつげた。ノルウェー汽船 Venus 号（10,000 t）のデッキで出航まで博士と語りつづけた。白夜のシーズンとて、夜でも新聞の読める明るさであった。博士は私を駅で迎え、港で見送ってくれた。その頃の思い出は「科学の実験」（1957）に書いた。

註：上野実朗 1957 北ヨーロッパの花粉研究めぐり 科学の実験 VIII—11 pp. 69—76

### 33 ノルウェー・ベルゲン大学フェーグリー博士への再訪（昭和57年7月15日）

**Second visit of Dr. Knut Faegri (1982 07 15)**

**My old friend, Great pioneer of Palynology.**

**Dr. Philos. Professor Emeritus of Systematic Botany and Plant Taxonomy, Plant Geography. Botanisk Museum. University of Bergen, Norway.**

私は敗戦直後の結婚なので、新婚旅行はしなかった。そこで旧婚旅行を兼ねて北欧の白夜ツアーに参加することにした。そしてベルゲンとストックホルムの旧友に手紙を出した。私のベルゲン到着は1982年7月15日で、翌16日にはフィヨルド見物に出かける予定である。フェーグリー博士に会えるのは7月15日だけである。博士はすぐに返事をくれた。「残念だが、君のベルゲン滞在は余りに短かすぎる。とにかくスイス航空 SK 303 を飛行場に迎えにゆく、家内も楽しみにしている。夕食は家に来てくれ。」私もすぐに返事をした。飛行機は朝8時40分に貴地へつくが、午前中は「北欧ツアー」の一行と名曲ペールギュントの作者 Edvard Grieg（グリーク）の家を訪れる予定である。そこで博士とは昼食後、ベルゲン駅隣の Hotel Terminus で午後2時会うこととした。

定刻にワクワクしながらホテルの入口で待っていた。5分たっても来ない。その時アナウンスが聞えた。「日本のドクター・ウエノに伝言あります」。見覚えあるベルゲン大学の白封筒に、大きく赤く HASTER!（至急）と書いてあった。手紙には「夫人が急病

で入院した。3時にホテルにゆく」とあった……。26年待ったあとの1時間は早かった。北欧は8年ぶりの猛暑と快晴がつづいていた。突然、無帽・長身・白長ソデYシャツ・ノーネクタイ・白半ズボン・白クツ下・白クツそして白髪の人が入ってきた。Prof. Faegri! と呼ぶと彼は私の手を握り UENO! と答えた。早口で、とにかく大学へ来いと言う。私と家内を乗せた彼の愛車スウェーデン製 VOLVO のバンは大学1階のガレージにすぐについた。彼の夫人は私に会うのを楽しみにしていたが、突然悪くなり今朝入院したと悲しげに説明した。

ベルゲン大学は建て変わっていた。昔の通りに5階であったが、白いモダンな鉄筋コンクリートになっていた。1階はガレージで広々としていた。彼はマスターキーでガレージの扉もエレベーターも各所のドアも開けて、「これ便利だろう」と笑っていた。そういえば、26年前の写真でも右手に鍵束をにぎって、その右に愛用の自転車があった。

昔は6室位であったが、今は20室位になっていた。長い廊下の左右に研究室・講義室・実験室・標本室・電頭室・暗室（ドアが円筒の回転式で、彼はここに入れてくれた）・図書室・事務室そして休息室。どこも昔を思い出させるものはなかった。ただ壁にかけられた多くの標本・図・グラフ・写真は BOTANISKE MUSEUM のままであった。私は去年、紀州高野山で採集したコウヤマキ *Sciadopitys verticillata* S. et Z. の雄花と毬果をプレゼントした。日本特産のこの針葉樹は北欧の化石にもある<sup>(註)</sup>コウヤマキは彼の花粉分析のテキスト p. 227 にも重要花粉と明記してある。北欧の人は画が好きで、とくに空想の動植物が上手である。教室のアチコチに色々な画があった。トール TROL とよぶお化けは男女で山に住み、良いことも悪いこともするし、恋愛も失恋もドロボーもするが、夜明けとともに姿が見えなくなるという。TROL はノルウェーのマスコットで博士の研究室にもあった。しかし日本好きの博士は電頭は日本電子 K.K. のを愛用し、さらに自室のドアには大型の日本娘のカラーヌードが貼ってあった。ブロンド娘の金

髪と碧眼しか知らない学生達に、日本へゆくと黒い髪と瞳の美しい女性に会えるという配慮であろうか。

廊下には70歳(古稀)の定年退官の折の記念の油絵があった。赤ジャンパーに黒ベルトを締め、紺のジーパンのような作業ズボンに無帽の彼が腰かけていた。少しも気取らない彼は、そのまま花粉分析か生態調査に出かけるようであった。

彼は日本流に言うと明治42(1909)年7月17日の酉(トリ)年生まれで、ベルゲン大学学則通りに満70歳になった1979(昭和54)年7月17日に退官した。つまり私よりも4歳年上である。したがって前回訪問の折は彼は47歳、私は43歳であった。当時の写真と比較すると誠に楽しい限りである。このスライドは去る1982年9月25日の東京花粉研究会第131回例会と10月24日の第23回日本花粉学会大会で会員にお見せした。

彼は花粉分析の父、Von Postの高弟で、スウェーデンのGunner Erdtman(1897—1973)、デンマークのJohs. Iversen(1904—1971)とならんで北欧三羽鳥の一人である。ベルゲン子の彼は40年以上もここで研究して来た。ノルウェーの至る所でボーリングした。彼とイーベルセンの共著「花粉分析教科書」は世界の花粉分析学者にとって座右の書である。この本は、別名で1950(昭和25)年に初版を出した。イーベルセンの死後、改名して第3版(1975)を一人で出した。しかし扉にはTo The Memory of Johs. Iversenと彼は記している。彼は最新版のこの本を記念に私にくれた。彼のサインは、To Jitsuro Ueno, on the occasion of his second visit to Bergen, 15 June 1982である。そのReferencesに日本人の文献としては、幾瀬マサ(1965)・石田肇(1970)・三好教夫(1965)・塚田松雄(1958)・上野実朗(1958、1960)が出ていた。花粉誌、Jap. J. Palynol. No. 6(1970)も見えた。

彼はもう一冊、NATUREN(No. 3, 1979)をくれた。表紙には赤の丸首シャツ・茶色半ズボン・無帽の彼が夏草の花が乱れ咲く、カバの林の前に立っている写真がでている。この雑誌は彼の記念号であ

った。その中で彼の漫画もあった。植木鉢の中から生まれてきた彼が伸びすぎ支柱に首をしぼられており名札の学名(ラテン語)を判読すると *Faegri jecunda Hibiscus* とある。つまり「人に好かれる親切なフェーグリー」。俗名ハイビスカスの花言葉は「人間性」である。彼の性格をよく示している。もうひとつの面白い写真は、彼がコック帽をかぶせられ、大鍋の前に教科書を片手に、料理に苦心している姿である。イタズラ好きの学生達が彼の古稀(70歳)祝賀会場の即興で、大フロシキに包んだ大鍋とパンカゴとコック帽と教科書をおくりポーズをとらせたものらしい。彼はにこやかに名コック振り、つまり名講義を演出している。まさに *Faegri jecunda* である。

私は彼の名誉教授室で日本花粉学会会員の田中肇氏作のマツの花粉を型どった銀製のループタイを彼の首にかけた。そして上野と田中からのプレゼントであると話をした。また日本花粉学会会誌 Vol. 28—No. 1(1982.VI)と改訂版・花粉百話(1982)もおくった。机には世界の花粉学者カードの箱があり、彼はその日の寄贈をすぐに私のカードに記した。

彼の長い間の成果の論文・別刷・標本・カラーズライド・プレパラート・グラフなどは見事に整理されていた。とくに生態学者の彼が世界中を歩いて、自分で写した教材用スライドは自慢するだけあった。医師のレントゲンフィルム検査のように、壁が1メートル四方の光源となり、約200枚ずつ同時に調べられるようにカラーズライドをはめたプレートが何百枚も木製ケースに納められていた。私は知らなかったが、4年前1978年に日本にも立ち寄って、宮脇博士(?)の案内で富士山へも行ったという。富士山は静岡大学在勤12年間、毎年歩いた私のホームグラウンドである。スライドを見乍ら、地点と高度を告げると彼は喜んでた。

こうしている間に時間は過ぎて、夕方6時頃になった。北緯61度のベルゲンの7月ではまだ真昼である。彼は私達をドライブに誘った。

註：前川文夫 日本固有の植物(p.95 コウヤマキの分布をたどる)1978 玉川選書75

### 34 ヒース地帯ハタンへのドライブ (ノルウェー・ベルゲン)

#### Drive to Heath-moor, Havtun (Bergen, Norway)

フェーグリー博士は研究室と同じように、ノルウェーの自然を私に見せたかった。それは40年間通いなれたHAVTUN (ハタン岬) へのドライブであった。ベルゲンから国道555号線を西へ50 km、Tofte-røy 島にあるTuristsenterが目的地である。彼によるとフィヨルド先端で北海からの西風の強い所では木は育たない。どこまでも岩石地帯で、その上にわずか10 cm位の土があればヒース地帯Heath-moorとなる。そこにはネズ*Juniperus* sp. が低く20 cmの高さにはっており、ツツジ科のギヨリウモドキ*Calluna vulgaris*、エリカ*Erica* sp. や、キキョウ科のツリガネソウCampanulaceae *Adenophora* sp.、アカバナ科ヤナギラン*Epilobium* sp.の花やイネ科のヒースグラスHeather grass *Sieglingia decumbens*が風になびいていた。彼は時々、車を止めて少し歩いた。私の家内がエリカなどの花を摘むと、博士は花束を作って家内へプレゼントしてくれた。フェーグリー夫人も一緒だったらどんなに良かったろう。また途中の入江で無人の廃屋の前で休んだ。白髪を風になびかせ、博士は仁王立ちになって、あたりのフロラを説明した。彼の身体にバイキングの血が流れているのを見た感じがした。ここは真冬でも海流の為にそんなに寒くないとの事であった。

約30分ドライブしてガソリンを補給した。ここでは彼が自分でホースを握って、なれた手付で給油し、伝票を書いて事務室に渡した。カメラを向けると一寸すまして見せた。さらに30分走るとHAVTUNについた。フェーグリー教授の野外ゼミをする所である。入江を見下ろした食堂でマス料理をたべる。これは26年前にフェーグリー夫人のつくってくれたノルウェー料理である。私がこの事を話すと彼は悲しげにうなずいて、どこの家だったかと聞く。町の中のアパートだったと答えると、随分昔の話だと

笑った。ビールを飲むと、お互いに少し元気がでた。

帰りのドライブは少しヒヤヒヤした。ビールで調子のついた彼は対向車のいないヒース地帯を80 kmでとぼした。私はねむくなった。考えてみると、昨日7月14日朝5時に起床して、成田飛行場を11時に離陸した。シベリアをこえてモスクワ経由、コペンハーゲンで乗継ぎ、ノルウェーのオスロOsloについたのが現地時間の真夜中近くであった。そして今日7月15日朝6時におき、8時にオスローをでて8時40分にベルゲンについた。時差を入れると約31時間の「お通夜」の翌日である。ウトウトする助手席の私に気付き、家へ寄ってコーヒーを飲んでゆけとすすめる。私は断った。早くホテルに帰ってねむりたかった。夜8時はまだ明るい。ノルウェーの夏はこれからだと彼は言う。私はソレどころではなかった。目をあけると大学の横をぬけている。助かったホテルは間近いと安心した。

ベルゲン駅がみえたが、彼はそのまま車を走らす。そして右に曲ってFløien山道を登り出した。昔、登山車で登った展望台のある山である。きっとそこへ案内してくれると思っていた。急に止まって、降りろという。白ペンキの木造の旧式な家である。建ってから100年位はたっているだろう。ここが彼の自宅であった。

彼は両親の家を10余年前にもらって移ったという。窓からはベルゲン湾が見下ろせる。ベルゲンの一等地である。旧式の家具、鳴らないピアノ、古い写真、沢山の本、美しい花壇。すべてノルウェー式である。彼は広い机を海側の窓辺において読書するらしかった。グリークの家を思わせるものがあつた。

コーヒーを飲みながら、二人で遠い海の果てを見て一休みした。病院へ電話している彼の声があった。終わってから彼は、妻はよくなつたらしいと嬉しそうに告げてくれた。別れの時間が迫ってきた。ホテルまで送ってから握手をして、又会おうとお互いに言った。丁度、26年前ビーナス号のデッキで別れたように。

Au revoir Monsieur Faegri!

〔参考〕

- 上野実朗：1957 北ヨーロッパの花粉研究所めぐり  
科学の実験 VIII—11：pp. 69—76 (昭和32年)
- Knut Faegri and Johs. Iversen 1950 Textbook of  
modern pollen analysis. Munksgaard Denmark.
- Knut Faegri & L. Van Der Pijl 1966 The Principles  
of Pollination Ecology. Pergamon Press  
London.
- Knut Faegri and Johs. Iversen 1975 Textbook of  
pollen analysis. Third revised edition Munksgaard  
Denmark
- Naturen nr. 3 1979 Spesialhefte i anledning Knut  
Faegris 70 ars dag 17, juli 1979.

35 第1回ストックホルム花粉研究所の思い出 (昭和31年6月3日～6日)

**Souvenir of Palynological Laboratory  
(Bromma, Stockholm) (1956 June)**

**Palynologiska Laboratoriet. Statens  
Naturvetenskapliga Forsku Forskningsråd.  
Kungl Lantmateristyrelsen.**

私は1956 (昭和31)年6月3～6日、スウェーデンのG.Erdtmanの花粉研究所を訪れた。場所はBrommaで、入口の名札には上記のようにあった。エルトマンは当時59歳で、元気そのものであった。彼の名著 *Pollen Morphology and Plant Taxonomy-Angiosperms* (1952) の序文にもあるように、私は *Trapella sinensis* ヒシモドキ・ムシズル (Pedaliaceae ゴマ科) などの資料や文献を彼に送って協力していた。当時日本には花粉形態学の専門家はいなかったのでは是非その教えを受けたかった。またデンマークのCopenhagenにJohs. Iversenがいたが、アメリカ出張中で会えなかったのは残念であった。1956年6月2日にCopenhagenからフェリーでスカンジナビア半島南端のMalmö (マルメ) に渡り、1956年6月3日早朝、ストックホルムに着いた。すぐに日本大使館に連絡にゆくと、スウェーデンには何人か日本人がいるが、ノルウェーには日本人は一人もい

ないから注意してくれとのことであった。花粉研究所へ電話すると、6月4日8時30分に助手のJoseph Praglowski (プラゴロフスキー) がゆくからという返事であった。

6月4日約束の時間通りに背広姿で長身・黒髪的好青年が迎えに来た。彼は机上に地図を示して、コースと時間とスケジュール [午前はアセトリシス実技、午後は文献検索] を告げた。東京なら銀座に当たるKungsgatan (クングスガータン [王宮通り]) から地下鉄に乗ってbronmaに行った。

エルトマン博士は白い実験衣に長身をつつみ、トレードマークのヒゲ・蝶ネクタイ・淡青のYシャツで歓迎してくれた。研究所のスタッフは前年から採用されたプラゴロフスキーが一人いただけであった。エルトマンは週に何日かストックホルム大学へ講義と指導に行き、研究所の拡張の準備をしていた。したがって昭和56 (1981)年11月13日に来日したDr. Siwert Nilssonは当時まだいなかった。エルトマンの指導は正確そのものであった。アセトリシス処理でも右手と左手の使い分け、不用な手はポケットに入れる。プレパラートに花粉を置く方法、ラベルの書き方と貼り方、プレパラート・ケースの整理法、顕微鏡写真、スケッチ、花粉データのカード記入法とその整理法、文献カード・人名カードなどを次々と教えてくれた。その成果は1982年再訪の折に新しい研究所で見事に実っていた。

エルトマン博士はプレパラート・ケースのロッカーに囲まれた研究室の中央に大きな実験机をおき、顕微鏡写真装置をのせたZeiss顕微鏡は常置されていた。机にはカバーをかけて帰る。この様式はあとで日本でも利用したが中々便利であった。彼は朝入室すると昼まで休まない。昼は北欧では簡単に済ます。コーヒーとビスケットだけである。パリで2時間もかけて、ユックリと楽しんでいた私には一寸まごついた。

1956 (昭和31)年6月5日、エルトマン博士は私を自宅に呼んでくれた。研究所から歩いて約20分ほどのアパートの3階であった。途中小さい湖水を回

って歩き乍ら、冬は湖面が凍結するのでスケートで横断すると早いと言った。そして湖岸の岩の筋をコーモリ傘でつついて氷河の痕だと教えてくれた。当時の写真ではレインコートと大きな折カバンを持っていた。アパートの周囲には赤マツに似た色の幹が直立した *Pinus sylvestris* が立っていた。博士にとって日本人のお客は私が最初であった。彼は自慢のスケッチを沢山とり出して見せてくれた。8畳位の室の窓際にイスを持ち出して彼が座り、私を2メートル位離れたイスに座らせた。次々と見せる姿に博士夫人は慣れているらしかった。夫人は「この人、戦争中も陣地でスケッチしていたのです。」と笑いながら見ていた。エルトマンは何か一枚記念にくれるというので、サインをして彼の自画像を頂いた。チョビヒゲは正確に鼻の下で中断し、実物の博士はそこを墨でぬっていた。左耳は右耳よりやや大きく、右目は左目より大きい。鼻はやや上をむいてペチャンコで、孔は正面からもよく見える。これが私の顔の特徴だと言った。この画は縮小して日本花粉学会誌 No. 11 (1973) にある。

エルトマン博士は光学顕微鏡の分解能限界までのスケッチをした。彼は自分の観察には自信があった。後で私と論争したこともあった。スギ花粉の突出部 Papilla の先端は開孔しているというのがエルトマン説であった。私は開孔せず閉じており、単なる外皮の突出であると唱えた。私は透過型電子顕微鏡で、パピラの断面写真を、走査型電子顕微鏡でパピラ先端の表面写真をとって証明した。しかしエルトマン博士は他人の説が確かな証明がない限り、自説を曲げなかった。国際会議では最後にエルトマン博士はいつも言った。I think so! これはパリの Van Campe 博士も同感であった。エルトマン博士は北欧の花粉分析の父 Von Post の高弟三羽鳥では最年長で、彼の業績は花粉形態学では不滅である。彼は多くの協力者を持ち、それらの人々と仲良く仕事をした。竹岡政治 (京都府大教授) もその一人であった。ノルウェーのフェーグリーは彼を Gunni と呼んで敬愛した。彼の指導を受けられたことを今も有難く思っ

ている。

[参考]

G.Erdtman 1952 Pollen Morphology and Plant Taxonomy-Angiosperms (An Introduction to Palynology. I) Almqvist & Wiksell. Stockholm

G.Erdtman 1969 Handbook of Palynology. Munksgaard. Professor and Director, Palynological Laboratory, Solna, Sweden. Partly compiled in collaboration with members of the staff of the Laboratory (J.Praglowsky, S.Nilsson, Anita Dunbar) and visiting scientists in the years 1948-1968.

J.Ueno 1973 Souvenir of Dr. G.Erdtman. Jpn. J. Palyn. No. 11.

上野実朗 1957 北ヨーロッパの花粉研究所めぐり 科学の実験VIII—11: pp. 69—76

36 第2回のストックホルム研究所とブラゴルフスキー博士への訪問 (昭和57年7月20日)

**Second visit of Stockholm and Dr. J.Praglowski (1982 07 20) Palynologiska Laboratoriet Naturhistoriska Riksmuseet.**

ストックホルム訪問が決まると早速、ニルソンとブラゴルフスキー両博士へ連絡した。しかしニルソン博士は第2回国際空中生物学会議 Second International Conference on Aerobiology (花粉学講話 IV No. 38) に出席のため不在で、すべてブラゴルフスキー博士が引受けてくれた。また世話になったエルトマン夫人も旅行中で残念ながら会えなかった。

26年たってもブラゴルフスキー博士は変わらなかった。1982(昭和57)年7月18日オスロを旅行寝台車で出て、19日朝ストックホルム中央駅についた。その日はスカンセン野外博物館 Skansen Opun Air Museum で一休みしてホテルに帰ると、フロントに伝言が来ていた。明朝8時から8時30分までの間に研究所へ電話をしてくれ。私はその時間に電話すると、事務局室の直通電話に彼はまっていた。10分後ホテルに灰色のBMWが迎えに来た。往年の好青年

は今や立派な紳士であった。車中2人とも話はずきない。彼は今の研究所は4代目で、最初のブロンマを知っている人は殆どいないという。また私の滞在時間が短かすぎると残念がっていた。今度来る時は所内のゲストルームに是非泊まれという。それはシングルベッドと机と洗面台のついた明るい室のゲストルームであった。所内の空気は昔と変わらずキビキビとして能率的であった。

彼の室には恩師エルトマン博士と彼の愛妻の写真がかかっていた。空中花粉調査はいま大事な仕事となっていた。つまり花粉形態調査は一段落したので、その成果をあげて Airborne (空中浮遊物) 研究にとりこんでいた。空中花粉調査については1981年に来日したニルソン博士のスライドでも見た巻取式採集装置を使用していた。しかし詳しいことは聞く時間がなかった。旧式な大型装置も置いてあった。花粉数の計算には大小のカラーの玉のついたソロバンを利用していた。女性研究員が慣れた手つきで整理をしていた。男性研究員もビノキュラーをつかってプレパラート作製をしていた。夏期休暇なので他の研究員は留守であった。ニルソンの机の前には東邦大学での講演会(1981.11.13)のあとの寄書きが大切に貼ってあった。

走査電子顕微鏡は日本電子 JEOL で、ストックホルム駐在員の青柳氏が協力していた。標本室はエルトマン博士以来のプレパラートがABCの科ごとに納められていた、つまりエルトマンの名著(1952)が索引となる訳である。面白いことに壁の世界地図に黄色(アフリカ・マダガスカル)・ダイダイ色(オーストラリア・ニュージーランド)・緑色(中国・日本・シベリア・マレー・ジャワ)・薄紫色(南米・南極大陸)・白色(ヨーロッパ・北米)と色がぬってあり、プレパラートガラスの右にもその色紙が貼ってある。こうすればケースの蓋を開いただけで産地別にとり出せる訳である。

図書室では別刷に一連番号が記されて、100番ごとに一冊ずつの表紙にとじられていた。また単行本は中国のもの台湾のもの日本のもあった。日本花粉学会会

誌の写真・サンマリーはよく知られていた。私の花粉学研究は2冊あり、その1冊は逆に入っていた。学生か誰かが見た証であろう。階段教室では教卓の横で、男子2人と女子3人がお茶 Tea Break をやっていた。北欧では昼食に時間をかけないのは昔からの風習だが、その代わりに午前と午後にお茶の時間を楽しんでいる。ノルウェーのベルゲン大学ではすり切れたソファとインスタントのネスカフェと雑誌がおいてあった。しかしここでは正式のコーヒーセットの用意がしてあった。

エルトマン博士のペン画はあちこちに貼ってあった。その中にトール Trol らしい想像の怪物がマツ・ハンノキ・ユリなどの花粉やヒカゲノコズラなどの胞子にとり囲まれ、ゴキゲンに舌なめずりしながら座っている姿があった。恐らくあの世でエルトマン博士はこうして花粉と遊んでいることだろう。これらのスライドは1982年9月25日の東京花粉研究会第131回例会と10月24日の第23回日本花粉学会大会でお見せした。

[参考]

S.Nilsson 1981 Palynological lecture in Tokyo. Jpn. J.Palyn. Vol. 27 No. 21 Gentianaceae (1981 Nov. 13) Aeropalynology (1981 Nov. 14) (日本花粉学会会誌 Vol. 27 No. 2 p. 70)

Siwert Nilsson, Joseph Praglowski and Lennart Nilsson 1977 Atlas of airborne pollen grains and spores in northern Europe. Stockholm.

G.Erdtman 1952 Pollen morphology and Plant Taxonomy, Angiosperms (An Introduction to Palynology I) Stockholm.

### 37 横浜・豊顕寺のコウヤマキ *Sciadopitys* of Bugenji Temple, Yokohama (Kanagawa Pref.)

コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc. (コウヤマキ科 *Sciadopityaceae*) は私の大好きな木である。この講話 No. 6, 7 にも書いたが、横浜にも大木があった。この木は1863年ロンドン出版の R. Fortune 著 Yede and Peking に図がでている。同じ

木を1917(大正6)年に清水藤太郎が写真をとっている。植物研究雑誌 Vol.1—No.7 p.183 にこの2図を並べて久内清孝博士が解説されている。今日ではこの名木は無いらしい。この寺あとでも訪れてみたいものである。横浜市立大学の学友に調べて頂きたい。

註：久内清孝：杜中軒緒鞭夜話植物研究雑誌 Vol.1—No.7 (大正6年7月発行)

註：花粉学講話 I (5、6、7) 日本花粉学会会誌 Vol.27—No.1 (1981)

註：東邦大学名誉教授久内清孝先生追悼集 (1982)

### 38 第2回国際空中生物学会議 (昭和57年8月)

**Second International Conference on Aerobiology August 4, 5 and 6, 1982. Seattle, Washington U.S.A.**

1982(昭和57)年8月4、5、6の3日間、アメリカのシアトルで開かれた。議題としては、(1)都会地域の空中生物学、(2)自然の生態学における空中生物学、(3)空中生物学の技術、(4)管理生態系における空中生物学、(5)空中生物学問題の調整—関連とモデル。

空中生物学は大気中の浮遊物移動についての科学的研究で、植物・動物・人間・昆虫・アレルギー・大気汚染・花粉学・植物生態・食物連鎖・気象学などと深い関係がある。第1回国際空中生物学会議が1978(昭和53)年Munich(ミュンヘン)で開かれてから、多くの科学者が各領域から参加している。第23回日本花粉学会大会のパネルディスカッションのテーマも将来、空中生物学と手を結んで大いに発展する分野の研究である。

International Association For Aerobiology.  
American Meteorological Society. University  
of Washington. College of Forest Resources.  
Department of Civil Engineering. Quaternary  
Research Center. School of Public Health and  
Community Medicine.

### 39 第6回国際花粉学会議 (昭和59年8月)

**VI IPC (International Palynological Conference) (Calgary, CANADA) (1984 VIII 24—30)**

第6回国際花粉学会議は1984年8月24～30日にカナダのカルガリーで開かれる。予告案内第2報はInternational Commission for Palynology (Vol.5—No.1 Juin 1982)によると、かなりの参加者からの返事がきている。

私は第4回国際花粉学会議(インド・ラクノー1977)に参加した。正直な話、ペラペラとやられると半分位しか理解できない。しかし形態関係やミツバチ花粉団子や空中花粉調査などでは大体わかる。諸演要旨もあるので、あとから質問したり、資料交換も可能である。第4回では私はConvener(プログラム委員)と座長と発表者の一人三役をやったので、多忙であった。しかしやってやれないことは無いという自信もついた。

カルガリーへの参加はまだ思案中である。しかしフリーで行くのも、ひとつの行き方である。思いがけない問題・資料や旧い学友に会えるかも知れない。

カルガリーへの参加希望者はICP委員の徳永重元氏(〒160 東京都新宿区百人町2—17—18 Tel 03—371—4009)へどうぞ問い合わせ下さい。

[参考]

Sixth International Palynological Conference  
First Circular.

IPC Newsletter Vol. 4 No.2 Dec. 1981

IPC Newsletter Vol. 5 No.1 Juin 1982

AASP Newsletter Vol.15 No.1 Jan, 1982  
(American Association of AAA Stratigraphic  
Palynologist 1987)

日本交通公社・海外旅行虎の門支店では、第6回国際花粉学会議出席旅行(案)をつくって会員に送付した。



#### 40 ケンブリッジ大学名誉教授コーナー博士と恩師・郡場先生の思い出

##### **Souvenir of Dr. E.J.H. Corner (Prof. Emeritus of Cambridge University) and My teacher Dr. Kwan Koriba (Prof. Emeritus of Kyoto University).**

コーナー博士は熱帯植物の権威で、もとシンガポール植物園副園長。菌類孢子研究者として1966(昭和41)年の東京大学で開催された太平洋学術会議の花粉学シンポジウムの座長をした。

郡場先生は昭和14年に京大理学部植物学科卒業研究のテーマとして「花粉の研究」を私に与えられた。その一言で私の生涯のコースは決まった。先生は定年後、シンガポール植物園長となった。

このコーナー博士が戦時中のシンガポール植物園とラッフルス博物館を舞台として本を書いた。戦後の英人は極端に日本嫌いであった。その一部は映画「戦場にかける橋」にも片鱗を見せている。私も1956(昭和31)年6月にイギリスを訪れた時にニュー・キャッスル港の税関でいじめられた。当時はロンドン市中で英人になぐられた日本人の話は珍しくなかった。その日本嫌いは今日もあるらしい。コーナー博士がこの本を1981年 *The Marquis: A Tale of Syonanto* (侯爵：昭南島物語)として Heinemann Books から出版した折に、大変な不評であった。シンガポールや英国では、あの野蛮な日本人が、戦時中に何かよい事をしたなどはウソツパチのデタラメだと、悪意にみちた書評ばかりであった。しかし深く日本人を理解し愛しつづけたコーナー博士の本が日本訳されると、多くの感激した読者の評が新聞にでた。昭南島とは戦時中、シンガポールにつけた日本名で、侯爵とは徳川義親ライ軍政監部最高顧問のこと。

私は1942(昭和17)年からビルマに出征していた。第3航空軍第5飛行師団第3航空通信連隊の通信暗号係の将校であった。前線の飛行場で勤務して2年たった。昭和19年春突然、シンガポールにある軍司令部へ出張を命ぜられた。暗号書返納のための飛行

であった。軍務を終えると早速、昭南植物園長の恩師・郡場寛(コーリバ・カン)先生を訪問した。先生は陸軍司政長官として園長を昭和17年12月からしておられた。当時、南方の占領下にあった多くの植物園にはそれぞれ、植物学者が園長となっていた。東京大学の中井猛之進博士はジャバのポイテンゾルグ植物園長であった。園長室での郡場先生はお元気であった。京大時代と少しも変わらずニコニコしながら、「上野君、勉強していますか」と聞かれたのには驚いた。汚れた野戦服に軍刀・ピストル・縞帯包をつけた私を先生はやはり実験衣の学生と思っていたらしい。「南方園有用植物図説」を一冊下さった。「上野君、これは寺内元帥から頼まれてつくった本です。もしも日本が負けても、南方軍300万の将兵は独立して現地自活できるようにとって作りました。」

この「図説」は緑色の表紙で、11.5×16.0 cmの小型ながら、厚さは4.3 cmもある。700ページの植物図に夫々ラテン名・和名・地方名・産地・性状・用途がかかれていた。先生がリーダーとして、植物園の標本と英人学者ホルタム博士(もと園長)、コーナー博士(もと副園長)および陸軍司政官で植物学者であった渡辺清彦博士<sup>(註)</sup>らの努力で出来た本である。先生は「上野君、この本はビルマでも役に立ちますよ」と言われた。しかしビルマでは爆撃でふきとんでしまった。

園長官舎で昼食をする時に、英人二人も全く日本人と同じように待遇された。貴重なキニーネ錠も食後に服用できた。マラリア予防である。2人の英人は胸に白い15×10 cm位の布をつけ、星のマークがついていた。陸軍捕虜のマークである。先生は、この2人は南方植物のオーソリチーで、生態学者でもあり、パリノロジーにも興味をもっていると語り、私をパリノロジストとして紹介された。それから14年たった。

1955(昭和30)年9月、私はパリ留学のため大阪商船の貨客船アトラス丸でマルセイユに向かった。9月20日シンガポールにつくと早速、なつかしい植物園を見に行った。園長は英人であったがソッケーな

かった。事務所から出てゆく私に一人のインド人が声をかけた。そのインド人は戦時中、郡場先生の下で働いていたと言って、あたりをうかがって、ソッと私に「南方圏有用植物図説」を渡してくれた。「私の大事な郡場先生の記念品です。しかし私には読めない。差し上げます。トップページとラストページが破ってあるのは、英軍憲兵のあらぬ疑いから逃れるためです。」「お名前は？」と聞くと「フカド」と答えた。いまこの本は私の宝となって活躍している<sup>(註)</sup>

1956 (昭和 31) 年 6 月、私はパリからストックホルム・ベルゲンとまわって、イギリスにつくとすぐに、ケンブリッジのコーナー教授を訪れた。駅ホームでまちかまえていた彼の第一声は「ドクター・コーナーバ元氣か？」であった。

彼は戦時中の苦しい生活の中での郡場先生の温情に涙して喜んでた。また 10 年たった 1966 (昭和 41) 年 8 月 23 日に太平洋花粉学シンポジウムが東京大学で行われた。これは太平洋学術会議の一部としてであった。コーナー博士はその司会をした。私もこのシンポジウムに参加して久しぶりの再会を楽しんだ。

そのコーナー博士が書いたのが、この中公新書「思い出の昭南博物館」である。

この本は「戦火から文化遺産を守りぬいた日英科学者の清冽な心の交流」である。しかも訳者は静岡大学教養部の石井美樹子助教授である。つくづく世間は狭いものと感じた。

私は「静大だより第 7 号 (1966. 9. 1)」に、「太平洋学術会議に出席して」の記事に次のように書いた。

「太平洋花粉学シンポジウムは 1966 (昭和 41) 年 8 月 23 日午前にコーナー教授司会の下に行われた。6 人の報告があった。(中略) 私はコーナー博士との再会が楽しみであった。彼は太平洋戦争前、シンガポール植物園副園長であったが、のちに陸軍の捕虜となった。昭和 17 年末に、私の恩師、京大名誉教授の郡場寛 (コーナーバ・カン) 先生が昭南植物園長となると、毎日植物園研究室に 2 人を呼んで学者として待遇された。或時は敵性英人として身柄の引渡し

を強引に迫った憲兵のピストルから、その身を守ったり、親切に世話をされた。終戦と同時に、植物園の中の仕事と荷物を見事に整理して引上げられた。のちにコーナー達が英軍憲兵と一緒に植物園事務所の接収に来た時、かつて英人達は日本軍進入の時にとり乱して引き上げたことを思い出した。そこで郡場先生の机だけでも整理してあげたいと一人だけ、憲兵より先に入った。そして先生の見事な整理ぶりや、コーナーとホルタムの机・引出し・使いかけの鉛筆一本まで片付てあったのに感激したという。

日本が昭南を占領した時に、寺内元帥の南方総軍司令部が植物園を軍用駐車場に使用した。郡場先生は寺内元帥に申し入れて、文化財を守るためトラックを退去させた。日本が敗戦すると、英軍は再び植物園を駐車場にした。コーナー達はマウントバッテン将軍に申し入れた。『あの日本軍でも郡場博士の一言でトラックを退去させた。勝利軍司令官としてマウントバッテン将軍は寺内元帥に負けてはなるまい。』この一言で、英軍トラックは植物園から去っていった。」

この話はコーナー博士からケンブリッジで聞かされた。博士の伝言をもって、私は秋に帰国した。丁度北大で日本植物学会大会があり、私はこの話を郡場先生に伝えた。先生は笑いながら、「ソナナコト、アリマシタカー」。その年の 12 月 14 日、郡場先生は弘前大学学長として弘前の官舎で不帰の客とされた。生前の先生にコーナー博士の伝言をお話してきたのは幸であった。

昭和 41 年の太平洋学術会議の席上で、私はコーナー博士に郡場先生のお宅が京都市にあることを話した。「お線香上げに行きませんか」と言うと、コーナー博士はうなずいていた。そして京都まで行かれた。それは 1966 (昭和 41) 年 9 月 11 日午後のことであった。郡場先生のお宅では、サカエ夫人と娘のサワ子さんがおられ、コーナー博士にとっては生まれて初めての「種ナシスイカ」をたべた (同書 p. 188)。

コーナー博士によると、郡場先生は軍服はきていたが、軍刀は公式の時以外はつけなかった。私もシ

ンガポールでは先生がいつも半ソデ・半ズボンであったことを覚えている。英軍がマウントバッテン将軍とともにシンガポール上陸する寸前、郡場先生はコーナー博士に手紙を書きのこした(同書 p. 192)。

#### 親愛なるコーナー博士

私は植物園を去らねばなりません。熱帯の植物について、いろいろ親切に教えてくれてありがとうございます。植物園も保護林も、最近になり、ひどく荒らされたのが残念でなりません。いまとなつては私にはもうどうすることもできませんが、あなたはずっとここにおられることでしょうか。植物園の発展を心から祈ります。

ホルタム博士とパートウィッスルさんによろしくお伝え下さい。 敬具

1945 (昭和 20) 年 8 月 28 日

郡 場 寛

木原均編 生物学閑話 (Vol. I—IV) の序によると、シンガポール在任中、郡場先生は日曜ごとにコーナー博士とジャングルに行き南方植物の観察をした。その結果は、「熱帯樹木の生長周期に関する研究」として発表された。私達、郡場先生の教え子は、戦後は芦田教授室で先生との談話を楽しみながら、サツマイモの弁当をたべた。それをまとめたのが、この生物学閑話 (4 冊) である。

訳者の石井さんから頂いた手紙 (1982.10.30) によると、来年コーナー夫妻が来日されるらしい。またの再会の日を今から楽しみにしている。

註：E.J.H.・コーナー著 石井美樹子訳 思い出の昭南博物館—占領下シンガポールと徳川侯 1982 中公新書 659 440 円

The Marquis: A Tale of Syonan-to by E.J.H. Corner.

First publisher by Heineman Books (Asia) Ltd., 1981.

The exclusive license to publish this Japanese edition granted to CHUOKORON-SHA Inc. through arrangement by Kern Associates, 1982.

註：静大だより 第 7 号 1966.9.1 上野実朗  
コーナー教授のこと 静岡大学学生部

註：南方圏有用植物図説 第二編食用植物 昭南植物園 昭和 20 年 5 月 20 日印刷 昭和 20 年 5 月 25 日発行 発行所 昭南植物園 編輯責任者 渡辺清彦 印刷責任者 渡辺太郎 印刷所 昭南軍政総監部印刷所 (1945)

註：生物学閑話—郡場寛博士との対談 木原均編 広川書店刊 Vol. I (昭和 37.10.10) Vol. II (昭和 41.11.10) Vol. III (昭和 43.1.15) Vol. IV pp.230—241 (昭和 45.5.1)

註：渡辺清彦 1900 (明治 33) 年、静岡県森町に生まれる。八高・東大をへて広島高校教授。戦時中、マライ・ベナン植物園長とシンガポール植物園副園長。静岡県立静岡農科大学教授・千葉大学教授・和洋女子大学教授。理学博士。非売品であるが「生物学」という本は、実物標本をのせた貴重な教科書で、私も勤務先の常葉学園大学で使用している。明治人の気骨あふれる名著である。

註：木原均博士も雑誌・遣伝 12 月号にコーナー博士の本を紹介される予定である。

註：石井美樹子 (イシイ・ミキコ) 成城大学文芸学部卒、1974—79 年ケンブリッジ大学で中世英文学を学ぶ。現在、静岡大学教養部助教授。

#### 41 沼田真教授の定年を祝す

##### Congratulation of Prof. Makoto NUMATA

畏友・沼田真博士は昭和 17 年東京文科大学植物学科を卒業。昭和 20 年 9 月千葉師範学校に着任。昭和 26 年千葉大学発足とともに文理学部に移り、以来 31 年間に教育と研究に精励された。文理学部改組後は理学部長を 4 期 9 年にわたってつとめられた。現在は千葉大学付属図書館長である。来る昭和 58 年 4 月 1 日に定年退官される。

日本における生態学の確立と普及に半生を捧げられた功は誠に大きい。花粉学についても深い理解を示し、日本花粉学会の会員である。今日の環境科学の創設期にあたり中心的な役割をはたした。日本生

態学会・日本雑草学会・日本雑草防除研究会などの会長を歴任し、財団法人日本自然保護協会理事長でもある。また昭和23年以来、千葉県生物学会会長として小・中・高校における野外の自然観察と研究に

根ざした生物学の教育普及にも貢献されている。どうぞこれからも益々御元気に御活躍されることを心から祈りたい。

## Summary

**32** First visit of Dr. K.Faegri, University of Bergen, Norway (1956 06 08-11). Hotel Rosenkrantz. Universitetes Botaniske Museum. **33** Second visit of Dr. K.Faegri, Great Pioner of Palynology. Prof. Emiritus of University of Bergen. Professor of Systematic Botany and Plant Geography. Botanisk Museum. Norway (1982 07 15). **34** Drive to Heath-moor, Havtun with Dr. K.Faegri. Juniperun, Calluna, Erica, Adenophora, Sieglingia, Epilobium. At home of Dr. Faegri (1982 07 15). **35** First visit of Palynologiska Laboratoriet of Dr. G.Erdtman, Stockholm, Bromma, Sweden (1956 06 02-06). **36** Second visit of Palynologiska Laboratoriet, Naturhistoriska Riksmuseet of Stockholm. Old friend Dr. Joseph Praglowski (1982 07 20). **37** *Sciadopitys verticillata* (Umbrella pine) of Bugenji, Yokohama (1863) in R.Fortune: Yedo and Peking (1863). **38** Second International Conference on Aerobiology (1982 08 4, 5, 6) Seattle, U.S.A. and Dr. Siwert Nilsson (Sweden). **39** VI I.P.C. (1984 08 24-30) Calgary, Canada. **40** Souvenir of Dr. E.J.H.Cornier (Prof. Emiritus of Cambridge University) and My Teacher Dr. Kwan Koriba (Prof. Emiritus of Kyoto University). A Tale of Botanic Garden of Singapore (Syonan-to) between War (1942—1945). **41** Congratulation of Dr. M.Numata, Prof. of Chiba University.